

『人間は樹木のごとく……』(V)

——旅と樹木の伝説——

佐佐木茂美*

1895年12月18日、東洋学者アンリ・コルディエ(Henri Cordier)はフランスにおけるマルコ・ポーロ研究の100周年を記念するイタリア学会主催の基調講演(於ソルボンヌ)で¹⁾、『世界の叙述』(『東方見聞録』)のフランス「地理学会」によるパリ国立図書館所蔵の現存最古の写本(フランス語)(B. N. f. fr. 1116)刊行(1824年)をまず寿ぎ、ポーロ研究における他の二つの画期的とする日付けを挙げる。最初の版本であるニュールンベルクにおけるドイツ語版刊行の1477年およびフランス語版本のパリでの印刷の1556年と。その講演翌年の印刷体では次の各国語による文献目録が付されている。ドイツ語、ラテン語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、英語、オランダ語、チェコ語、ロシア語、等。文献目録はすべてヨーロッパ各国のもの、日本はまだ記載されていない。

コルディエの講演より90年して1986年本格的な『マルコ・ポーロ書誌』(*Marco Polo Bibliography, 1477-1983*)が東洋の1国から刊行をみる。最初期印刷本の出た1477年以降を網羅的に、とくに日本、中国、朝鮮での版本、訳、研究、紹介を含むもので、これは特記に値しよう²⁾。

本『書誌』に照らすと我が国では1882年1月すでに伴信友によりポーロが2ページの紹介対象となっている³⁾。

邦語主要訳書はA. Ricci(英訳)による愛宕松男、青木一夫両氏のものやH. Yule et H. Cordier(英訳)による青木富太郎氏訳が挙げられ、いずれも重訳。さらにポーロ研究に付された岩村忍氏⁴⁾のMoule-Pelliot英訳本に基づくもの、と研究の最初のステップは整っている。

ただ日本語訳に至るまでは仲介としてまず①写本、②インクナブラによるその版本があり、その版本ないし写本(つまり①)の③ラテン語訳、④その現代英語訳、現代仏語訳……⑤その邦訳があるわけで、本『マルコ・ポーロ書誌』では検索が容易というわけではない(データのみ記載、解説は一切ない)。

しかし問題は、初期活字本(インクナブラ)の時代にフランス語(原語)からのラテン語訳を初めとする夥しい数の全ヨーロッパ規模の訳の特定の作業であり、本格的研究としては始められたばかりと言うべきであろう。

ボローニャのドミニコ会士フランチェスコ・ピピーノ(Francesco Pipino)によるラテン語訳(1320年頃)は桁外れの成功を納め、その写本の数も約50とも60余とも言われる。

148
(1)

* 言語文化学科 教授 中世フランス文学

ピピーノにもとづく別のラテン語訳を始めヨーロッパ諸語の14、15、16世紀の訳は数多く、ピピーノ本こそポーロのテキストの普及に最も重要な貢献を果たす⁵⁾。

1477年——今日知られる刊行の最古の日付け——以降1626年の間にこのラテン語版は47の印刷対象となる。残念ながらこの重要な『書誌』には明星大学図書館所蔵(稀刊本)のアントワーペンでの1483年頃の刊行で *De Consuetudinibus et conditionibus orientalium regionum* (ラテン語活字本初版、となっている) は記載から漏れている⁶⁾。『書誌』が補遺ないし補完される場合、パリ国立図書館蔵 B. N. 伝写本 2810 が我が国でなされている翻刻出版(岩波書店(1997年))、それより3年前(1994年3月)、明星大学でのソルボンヌ大学の Ph. メナール教授(Ménard)によるこの写本の挿画に関する講演(“L’Illustration du *Devisement du Monde* de Marco Polo”, 『明星大学研究紀要』(所収)、第2号、カラー頁(pp. 157-164)を含む pp. 152-178 参照)も収録されるべきものである⁷⁾。

植林と長寿、樹木と人間の相互変身

マルコポーロ(1270年の著作)の『世界の叙述』(『見聞録』)はモンゴルの覇者フビライハーン(世祖)(1260-1294)の記述にまず満ち、惜しみない賛辞を送り、「後にも、先にも」並ぶなき権勢の持ち主として示されている⁸⁾。

かれが特に強調するのはハーンのただならぬ樹木への趣向、その趣向の強調は同一の方向にある事で際立つ。86年後、1356年に書かれたマンドヴィルの『旅行記』は同じ人物を賛美しつつ、樹木趣向の記述はトーンを落とす。

マルコにおいて13世紀のヨーロッパではまだ考えられなかった

①植林趣味。通路に並木を植えさせその支配下に往来するものへの便宜をはかる⁹⁾、

②さらに豪壮な庭園の所有と造園の趣味であり銘木、巨木を遠隔地から取り寄せ、蒐集、身近に置いたことが細部をつくし記載されている¹⁰⁾。

ハーンの樹木への執心が「並木」を植え込ませて民への心配りをする政治的所作に連動したろう事は容易に想像がつく。

パリ国立図書館蔵伝写本1116番(ベネデット版本)にもチボー・ド・シュポワのポーロより受けた、と言う写本のうち3本による(ポーチエ版本)にも、なぜハーンが大道に「大木を植え込ませた」かの答えはない。

1553年ヴェネツィアの J. B. ラムージオ(Ramusio)(1485-1557)がおそらくはピピーノ版に依拠してイタリア語訳し、そのうえでおそらくは独自の、理由書きを挿入する¹¹⁾。単に挿入の程度に納まらぬ増幅の跡が全般に及び、いわばかれにより「ポーロの伝説化」が始まった、と言われる。「伝説化」されたこのテキストに「おかかえの占いや占星術師」(isuii divinatori e astrologhi)の進言があって実行に移された、とある。植林が「長寿」(vive longo tempo)の秘訣である、というのだ。

ヨーロッパ人、ポーロの視線で論じてきた本稿はかかる風習がモンゴルおよびアナトリアにみられることがジャン・ポール・ルーの『トルコ人およびモンゴル人の宗教』¹²⁾さらに

『アルタイ社会における聖なる動物界と植物界』¹³⁾の2書でまず指摘されていることに特に注目する。(ただそこでラムージオの増幅箇所のみが引用されている事には逡巡がある¹⁴⁾。

モンゴル、アナトリアに論拠とすべき所与を見出しえずにラムージオが引証されている事に注目しておきたい。実はこの発言がなにを根拠としているかは不明である。版本校訂者ポーチエは原作者が「百万の虚言を弄する者」と同郷人たちにより語り継がれてきていた¹⁵⁾としつつラムージオが「信頼しうるソース」¹⁶⁾によっていよう、と推定している。ラムージオをこれほどまで信頼しえるか、特に東洋学者が信頼を示していることは「書き残されたもの」が他にはない、と言う現実があるろう。

さわれ『世界の叙述』からこの人物まで下降すること280余年——ポーロの「伝説」のストックのうちに「樹木」と「生命」の不可分の関係があるいは見い出されていたかも知れない(これは推定であり、原著者の発言ではない)。また東方との交易によるまた宣教活動による絶えざる接触と貪婪なまでの知識欲が吸収してきたこの街にして、1冊のテキストのめぐりに興味あるデータがわれわれより遥かに原著者に近い、後世の証言として、同郷人の間に重ねられていく事は容易に想像される。

ここで「並木」に戻ろう。

「路はすべて1本1本が近等間隔におかれた巨木で造られ」(toutes ces voies sont ainsi faites de moult grans arbres l'un pres de l'autre)¹⁷⁾。

中世ヨーロッパに先駆けてモンゴルの帝国内に出現したこの並木路、それに驚嘆するヴェネツィアからのポーロ一行、ここには影響関係以前の感性、心情を問題とする「樹木」に「生命」を読み込む本能的な「根」が深く繋がってはいないか? 同一性現象が観察されないだろうか?

アルタイ語族というトルコ、モンゴル、トゥングースに共通する「根本概念の一つ」¹⁸⁾が「人間存在の根源が樹木にある」¹⁹⁾という確信である、という専門家の主張は前稿で扱った問題のそのまま根拠となるろう。

一方アルタイ語族に関して次の言い伝えが報告されている。ジンギスカンはある日狩に出て休憩し、とある大木の根元に埋葬された、と言う。生前「この場所は余の墓所に似つかわしい」と言っていたとも²⁰⁾同様な伝説、たまたま狩猟の途次に休憩の場所とした「立派な1本離れて立つ樹木」²¹⁾をみずからの埋葬の地とした、など。

ヤクートからイスラーム²²⁾に改宗したにかかわらずトルコ人の、モンゴル人の心性がなお独自のアルタイ語族の特性を保有し続けている事が本書序論をはじめ²³⁾随所に指摘されている「樹木崇拜の残滓」²⁴⁾、と著者は言う。

文化人類学者、民俗学者などによるヨーロッパ、先史アリア人における「樹木崇拜」²⁵⁾は19世紀末から20世紀初等にかけてすでに学会の常識となっていた、と考えられる。樹木に命が宿る²⁶⁾、ないし人間の靈魂が樹木に宿る²⁷⁾等。各分野の代表的な研究を拾う時、それがまさにユーラシア大陸に関し同一結論に達していることに驚かされる。ギリシャ・ローマに関する樹木は「人間と類似の存在」ないしその間の相互変身を考えていた²⁸⁾。ケルトにおける同種の高い位置付けが「樹木崇拜」に関しなされてもきている²⁹⁾。さらにガリアにお

ける「三大自然崇拜」のうち「樹木崇拜」が「もっともよく知られたものであった」³⁰⁾。おなじくガリアでは紀元後5世紀から6世紀にかけ、「樹木崇拜」に関する禁止令がまだ出されている³¹⁾との指摘もある。さらにヨーロッパ中世を『森林の黄金時代』³²⁾とし、——カエサルがかつて紀元前1世紀のガリアを2ヶ月行軍し続けても森林の途絶える地点には達しえない³³⁾広大な樹木空間——とする中世ヨーロッパがここで時間に置き換えられる。

「山の老人」の庭園と樹木の不在

さきの稿『人間は樹木のごとく……』³⁴⁾で『世界の叙述』のイスマエール派の長老——「山の老人」——の庭園の叙述から、イスラーム圏の「庭園」がキリスト教圏同様に「天国」を準え「庭」と「地上の楽園」の同一性に関して反復があることを指摘した。

『老人』は配下の者達に納得させた、その庭が楽園であると。(……)それゆえに楽園に似た庭を造らせた(……)ほんとうにこの地方のサラセン人はその庭が楽園であると信じたのである³⁵⁾。しかしキリスト教において同時に読まれる³⁶⁾植林と樹木の比喩の不在の事実は注目されてよい。樹木は果樹、「この世のあらゆる果実に満たされた最大の庭」(le plus grant *jardin* et le plus beau qui oncques fust veuz)³⁷⁾、そのうえにマホメットの言葉として、噴水にあやかる「ぶどう酒、ミルク、蜂蜜、水」³⁸⁾が設えられた「庭」は「かれらの地上の楽園」であった³⁹⁾。

食の面で充足させて暗殺を挙行させるハシシュ、麻薬、摩耶かしの極楽が描かれ、——果樹に対する反復はない——まして樹木の強意はここにはない。「庭園」の主要構成要素が樹木であるキリスト教圏の「地上の楽園」とは本質的に異なる。食の充足をもって「地上の楽園」とする「山の老人」の山間の空間はマルコ・ポーロをもって最初の報告と考えられ⁴⁰⁾る。14世紀の古仏語による、聖杯伝説とアレクサンドロス大王に関わる伝説を集約する『ペルスフォレ』(*Perceforest*)の一挿話がポーロの『世界の叙述』の影響からとも結論されている⁴¹⁾。

さらにここで注目されるのは「庭」を表す語 *jardin* が終始繰り返し使われている事である。

「かつて眼にしたこともなき最大の、もっとも美しい庭 (*jardin*)」⁴²⁾

jardin とは「囲いのある花、野菜等の植物、果樹(樹木)を植え付ける場所」である。花、野菜が記述されず、果樹さえも控えて示された時、強調されてくるのは「囲われた空間」である。この強意におかれた「囲い」は「山の老人」が人心をハシシュ⁴³⁾で操り幽閉する場のそれである。

「かれ(山の老人)は飲み物を若者たちに飲ませ、ただちに眠り込ませるのをならいとした。それからかれらを捕らえ、この庭に入れた (*mettre en cel jardin*)」⁴⁴⁾

こうしてかれらの「地上の楽園」は「獄舎」となる。

てここに語る」⁴⁵⁾として、大都の居城が詳述される。この居城を圍繞する「方形の外壁」が一方を1マイルとして4マイルに及ぶ⁴⁶⁾。

「壁」は「庭」を直接に取囲まない。ハーンの「庭」は「山の老人」の「庭」にみられる「囲われた空間」ではない。それは「築山」(tertre)⁴⁷⁾であり居城のほうから「北に」⁴⁸⁾向けられた視線を「一射程」のところに受けてそれを楽しませる光景である。「築山」は「人工」のもので、高さ350メートル弱で1マイル続いている⁴⁹⁾。

「その築山は樹木に満ち、かつ被われ、如何なる季節にも葉を失う事はなく、緑である。」(lequel mont est tout plain et tout couvert d'arbres, qui par nul temps n'y perdent feuilles ; mais toutes fois sont vers.)⁵⁰⁾

「して樹木はすべて緑にして、真っ青な緑でないものは見えない。それゆえにそれ(築山)は「緑なる山」と呼ばれる」(si que les arbres sont tuit vert, et le mont tout vert ; si que il n'y pert autre chose que tout vert. Et pour ce est il appellez "le mont vert").⁵¹⁾

色彩グリーンの、——「築山」を被い尽くす常緑樹の存在——3行弱に4回の「緑」の明示、これはその場の偶然の叙景描写ではない。「緑」たるべく、その空間が意図され、所有者の強いこの色彩への傾斜がある⁵²⁾。

「まさにそれ(築山)はその名に相応しい」(Et certes il a bien son nom à droit)⁵³⁾

マルコがモンゴルの宮廷を辞しておよそ25年、イタリアのフランシスコ会宣教師オードリック・ド・ポルドノーヌ(Odoricus de Foro Julio)は地中海西岸を經由して1314年中国に至る、16年におよぶ滞在の間ヨーロッパ人にとっての「驚異」と看做す事象に眼をやりラテン語で著述する⁵⁴⁾。当時この宣教師の著作と『世界の叙述』はしばしば纏めて1巻とし製本された⁵⁵⁾。ジャン・ド・マン(Jean de Meun)と並んで13世紀を代表する翻訳家ジャン・ド・ヴィネ訳によってハーンの宮殿、庭園——ポーロのオリジナルと看做される同じ言語かつハーンの宮殿のハイライトという同一場所の描写——と比較する時、浮上する差異が2冊のテキストの間にある。4マイルに延びる壁(Ch. xxvi, l. 6)、幾棟かの宮殿のなかでとりわけ立派な宮殿の中庭は、

「人工の山で、そこには他のたいそう立派な宮殿が建てられて、この山は木々が植え込まれ、それ故に「緑の山」と言わる。」(cortil de ce grant palais est faite une montaigne, en quoi .i. autre palais est edefié, qui est mout tres bel, et ceste montaigne est plantée de arbres, pour laquel chose ele est apelee la Montaigne Vert)

呼称「緑の山」を挙げるまで、色彩は一切示されていない。ただ一度、その「山」に樹が植え込まれ、それに呼称が由来する事が、平坦に述べられているにすぎない。

この証言⁵⁶⁾の散文調は、仏写本1116および写字生グレゴワールに溯及する校訂本(ポー

チエ本)を通してのマルコの眼が他の初期の写本においても同一か? どのような扱いになっているのか, 異同はあるのかの詳細な検討を重ねよう。

すべて築山、樹木、宮殿の同一色彩(グリーン)を記し、その美しさ、その香り(oud-*eur*)⁵⁷⁾が述べられるに対し、グレゴワール系(パリ国立図書館、仏写本 5649)は統一の取れた記述が見られる。

「山も樹木も宮殿も——それがひとつの驚異であるのだが——緑一色ゆえに眼に楽しい眺めである」。(si que le mont et les arbres et le palaiz est si belle chose a veoir pour la verdeur toute d'une maniere quec'est une merveille.)⁵⁸⁾

建物までが調和ある同一色ラピス=ラジュリが張られ(de rose (de lazur))⁵⁹⁾での緑色、との行と一貫性からも強調の度合いは強まる。

一方、トスカナ=ヴァージョン——グレゴワール本から派出したイタリア語訳によると、この一節から「樹木」が消え、強意に置かれるのは「山」にある「宮殿」となる。「真青な宮殿のある山の頂きに」⁶⁰⁾。オリジナルに近いヴァージョンほど「樹木」と色彩グリーンが強調の度合いを強めている事が確認される。

ポーロと共通の傾斜——樹木、緑——が読まれるのは13世紀を席卷した『薔薇の物語』(ギヨーム・ド・ロリスによる)で——1230年前編、「5年前⁶¹⁾の夢」の経験を想起するとして「わたくし」はテキストに入り込む。躊躇わずに赴く先は「愉楽」(Deduit)と呼ばれる擬人化の所有する閉ざされた⁶²⁾——「庭園」である。

「愉楽」、「庭園の主」(“seigneur du vergier”) (Ibid., v. 1636) ——「わたくし」の言葉で、このように確認される。「緑の空間」viridariumは「緑」viridisを語源とする⁶³⁾。同語源のvergier (s) が33回にわたって物語空間を規定する⁶⁴⁾。

これは「閉ざされた庭園」(jardin)にたいし11倍の頻度である。「わたくし」は鳥の声を聴いて、辺りが「緑色」(v. 679)になるのを見る⁶⁵⁾とある。

当時地理上の場所として考えられていた真正の「地上の楽園」に準えた『薔薇の物語』の偽似「地上の楽園」(paradis terrestre)⁶⁶⁾は樹木の繁茂する空間であり、「緑の空間」と定義されて、モンゴルの覇者のそれと近づく。「地上の楽園」にあやかりつつも、『薔薇の物語』の庭園はふたつのデータ(「緑」と鳥)により有机的関係で真正の「地上の楽園」からもハーンの庭園からも逸れる。

ハーンの「築山」を樹木で満たすためのかれの趣向が具体的に示される。

「どこかに立派な樹木があると聞くと、(ハーンは)そこがどこであろうとただちに人を遣り、取り寄せ、根ごと土を多量につけたままかれの(樹を)象に荷かせ築山に運び込ませる⁶⁷⁾。

複数の象はハーンの所有——マルコの証言によれば、大ハーンは二千頭に達する巨象を所有していた⁶⁸⁾——「樹木がかれ(ハーンの)の望むほどに大きかろうとも」(木がどんなに大きかろうと)⁶⁹⁾取り寄せる。「この世で最も美しい樹木」ともいう。

「愉楽」の趣向もたしかに立派な「大樹」取寄せであるが、地上で最も大きな四つ脚獣を何頭も動員する規模、「巨木」への重点の置きどころは樹木の「種類」への関心に席を譲る。

ヨーロッパ古典古代と中世の「植物」を論じてCh. ジョレはまずアレクサンドロス大王の印度遠征の帰路およびそれに続く時代に植物の移動が頻繁に行われた事を指摘している。イランや印度の植物がまずギリシャに齎され、ギリシャからイタリアを経て、スペインとガリア、紀元後にいたりゲルマニアおよびブリタニアに移植される⁷⁰⁾。アレクサンドロスのイラン征服が続く4世紀の間イランおよびギリシャ間の関係強化を将来したことを述べ、印度の宗教や哲学のギリシャに知られるようになるのはその動物界および植物界と同時である事を指摘している⁷¹⁾。さらに中世にアジアからギリシャおよびイタリアへの植物の搬入に関しアラビア商人の果たした役割は大きい⁷²⁾。

中世前期までの植物界の移動は、種(タネ)であったり、苗木、幼木であったり、人間の移住と深くかかわっていた、としてもマルコ・ポーロが詳細にわたって記載するハーンの、とりわけ強調されているいかなる「巨木」、「大樹」であろうと象を動員する移入法に関してはこれら上記の研究は一様に沈黙する。

搬入が不可能なサイズの事物が動く、ということは強大な意志が背後になければならないだろう。このような欲望を実現しえる立場は、輸送力の稚拙な時代にあっては王者に限られてくる。巨大な事物を運搬することの想像を絶する困難さは、古墳時代の我が国、ピラミッドのエジプトがそれぞれ容易に権力の表象と結びつくよう、キリスト教(ネストリウス派およびカトリック)、偶像崇拜者(仏教徒)を適当なスタンスで操り、ヨーロッパ・キリスト教圏の希望の星、司祭ヨハネをも倒したジンギス・ハーン⁷³⁾、太祖(1206-1227)の孫、モンゴルの支配者像がここで樹木の専有者、緑の空間の享受者として表されてくる。

ルスチケロとマルコ

その時、『世界の叙述』の著者・記述者のルスチケロとの間の役割が問題となる⁷⁴⁾。

この大ハーン像はアーサー王伝説を主題とした物語作家の眼が——筆述しつつ質問を繰り返し、旅行者の記憶を呼び覚まし、詳述を促す、用語などフランス語に熟知したこの人物であってみれば当時ヨーロッパ宮廷文化に固有のテクニカル・タームズの使用などが容易に想像されよう——相当な度合いで介入していないか? 前編40年して1278年(遅くとも完成)の後編の書かれる『薔薇の物語』はヨーロッパ各国語にただちに翻訳される——に親しんだ物語作家の視線があると想定される。

この「庭園」こそが唯一の舞台空間としてあり、先の稿で40種を超える樹木の植え込まれた「愉楽」の造園と所有の観点を特に強調してある⁷⁵⁾。アレキサンドリア⁷⁶⁾から、サラセンの地から美樹を搬入させ、おのれの緑の空間趣向を満足させる詳細——当時の文学伝統にはない——を指摘した。「愉楽」は宮廷文化の主神、指導者「愛神」を遙かに凌ぐ権勢の持ち主として現れてこないか? 「愉楽」=権勢の人の視点⁷⁷⁾モンゴルの覇者との間に影響関係ではない「類似」を読めないか。

文脈と用語の検討からの記述者ルスチケロの視点の想定は、ヨーロッパの文化的観点、旅行者の視点をさらに確認することとなる。これは同時に比較テキスト『薔薇の物語』の庭園の所有者・造園主が権勢の人として描かれていないか、というフランス文学研究内でいま

で取りあげられなかった問いをも導き出す事となる。ヴェルサーユ宮殿を待たずして、至高の存在「神」を「東に」(『創世記』、1-8) エデンの造園者、「生命の樹」、「知恵の樹」をはじめ果樹をそこに瞬時に「生じさせる」超自然の「庭師」のイメージをかたり、ヘブライの伝統⁷⁸⁾に抗うべからざる底流はある、としても中世宮廷風文化の現代性という側面が反映されてくるという意味である。

ハーンの豪華を極める住環境の描写は『世界の叙述』のなかでも現実と歴史にもとづく部分である。それが「驚異」として受け止められたのは当時のヨーロッパの「物語空間」との類似であった、と看做し得ることは二稿にわたっての本論稿の重要な、と思われる結論である。それは「樹木」のとりつける「縁」(エニシ)であり、その「縁」(エニシ)を切断する境界もまた『樹木は人間のごとく……』の詩的行間に見出されるものかもしれない⁷⁹⁾。

旅を執行した者とそれを叙述した者がヨーロッパ人である時、文化的「歪曲」が「樹木」の形象のもとに介在する。本テキストのいま一つの部分、「伝説」——その最たるものがアレクサンドロス伝説であるが——がそのローカル性、異なるヴァージョンを帯びる事を実地見聞の一步一步が確認する、それが「非神話化」に繋がりもする——が次の稿で論ぜられるはずである。

注

* "L'arbre seul, dans la nature, pour une raison typique, est vertical, avec l'homme" (Paul Claudel, "Le Pin", in *Connaissance de l'Est*, Paris, 1973, p. 248) の意識。クロードルは1898年5月31日、横浜—東京間陸路の移動中に発想を得ての3ページの小品、推敲の跡著しい。「樹木」はここで「松」を指す (G. Gadoffre, *Ibid.*, p. 252)。

詩人の捕捉した「松」は日本文化の文脈にあるが、この樹は中世仏文学の当初(11世紀末)すでに重要度・頻度数ともに「榎」に次ぐ樹木であった (CF. 『ローランの歌』、佐藤輝夫訳)。

- 1) *Centenaire de Marco Polo, Conférence faite à la Société d'études italiennes, le mercredi 18 décembre 1895*, texte imprimé: 1896.
- 2) Compiled by H. Watanabe, Tokyo, 345 p.
- 3) 同掲書、N°1069、「中外経緯伝草稿」。この文章はN°1071、N°1072、N°1073。cf. 渡辺宏「日本におけるマルコ・ポーロ I, II, III, IV」、『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』(同掲論文、IV, 1978, p. 62) によると明治38年(1906年)刊、堀田璋左石、青木武助、深沢鎌吉著、『東洋歴史辞典』(中学三年教科書の整理収録)には「トローケンブロンク東方見聞録 *Mirabilia Mund* 元の世相に仕へたるイタリア、ベニスの人ポーロが、20年間東洋に於いて見聞せしことを語り、ルスチチアノをして、筆記せしめたるものなり」(p. 281)とあり、さらにポーロの項目では、「マルコ・ポーロ Marco Polo イタリアのベネチア人なり、陸路蒙古に至り、元の世相に仕ふる19年余にして、波斯に至り、尋で国に帰り、盛に東方の繁盛を説き、見聞記を著せり」(p. 338)。渡辺氏は1912年の瓜生寅(ハジメ)の『まるこぼろ紀行』(T. Wright 英訳から)、『書誌』、N°244)の邦訳を重視、昭和20年まで唯一の「基準書」(同掲論文、p. 63)としている。
- 4) 『マルコ・ポーロ研究』(上巻)(中、下巻は未完)筑摩書房、1957年。他の邦訳に関しては、下記注(11)およびさきの拙稿『人間は樹木のごとく……』(II)(下掲*①参照)、p. 210, 注(2)および(4)。
- 5) 編者渡辺宏氏には『書誌』刊行後の『『世界誌』のゲール語本とアルスナル図書館の挿絵本』、『東西交渉』(所収)、通巻20号(1986)、pp. 24-29など追加すべき論稿が数多い。この論稿はゲール語(アイルランドのケルト系方言)による1460年の写本(ビビエノ系写本)の紹介でW. Stokes, *Zeitschrift für celtische Philologie*, Band 1 (1897), pp. 245-273, 362-438に依っている(氏の本論文執筆当時いたるまでストークス論文は90年間かつて引用対象になっていない、と指摘されている)。氏からは幾多の研究の恵送に浴し、上記は逝去直前であった(1998年7月)。(祈御冥福)。
- 6) それより2年後の刊行に相等する国会図書館蔵のみ収録されている(上記『書誌』、N°161)。
- 7) ポーロのヴェネツィア帰国(1295年)に次ぐ著作とミニチュア制作(1410年頃)の間にある通定するものと逸脱するものを鮮やかに論じたこの講演は本学講演とは別に、異なるヴァージョンでそれに比し限定された白黒の挿画入りでソルボンヌでも刊行された。

- 8) 『人間は……』(II)、p. 217。
- 9) 同掲論文、pp. 215-216。
- 10) 同掲論文、pp. 216-217。
- 11) *Navigazioni e Viaggi*, éd. par M. Milanese, vol. 3, Turin, p. 189. 2写本が現存。ベネデット(上記p. 3)によりミラーノのアンプロジアーナ図書館所蔵の写本が発見され、それが1470年ごろの写本の1冊の写しと特定された(コピー年代は1795年)。オリジナル写本はゼラーダ(Zelada)枢機卿の物でトレードのカテドラル図書館に譲渡されたもの。この写本も1932年発見された(L. Hambis (trad. et notes), *Marco Polo, La Description du Monde*, Paris, 1955, p. xiii)。
ラムージオ版はW. Marsdenの英訳(1818)、それを採録して版本を付したM. Komoroff (New York, 1926)の邦訳が1936年深沢正策氏によりなされている(『書誌』(上掲注2)参照)、N° 138, N° 108-119, N° 73)。
- 12) Jean-Paul Roux, *La Religion des Turcs et des Mongols*, Paris, 1984, p. 173.
- 13) *Faune et Flore sacrés dans les Sociétés Altaïques*, Paris, 1966, p. 377.
- 14) ルーの引用は高名なモンゴル(語)学者、ルイ・ハンピスによる『世界の叙述』(上掲注11)、p. 146)に依拠したもの。ハンピス自身ラムージオ以外の典拠を挙げてはいない。
- 15) たとえばアレクサンダー大王のダリウスの息女との結婚を記述した時、どのヴァージョンにもない、バダクシアン(アム河源流地帯)でポーロが1年近く病に倒れ、勧められて山の良い空気を吸いに転地、かれは健康を取り戻した、の記述がある。
- 16) “de bonnes sources” (Ed. Introduction, p. xxxiv).
- 17) *Le Livre de Marco Polo*, éd. par J. P. G. Pauthier, Paris, 1865, XCIX, p. 342, ll. 4-5.
- 18) “une des notions fondamentales” (J. P. Roux, *Faune...*, p. 357).
- 19) “Que la source de l’existence soit dans l’arbre est une des notions fondamentales” (*Ibid.*, p. 357).
- 20) “cette place est convenable pour ma sépulture” (J. P. Roux, *Faune...*, p. 378).
- 21) “un bel arbre solitaire” (J. P. Roux, *La Religion...*, p. 278).
- 22) イスラームにみられる樹木への冷淡な反応は先の稿(『人間は樹木のごとく……』、pp. 158-159, (本稿下掲③参照))。
- 23) *Faune...*, p. 3.
- 24) “survivances du “culte des arbres””, (*Ibid.*, p. 55).
- 25) ““Le culte des arbres” a joué un rôle important dans l’histoire religieuse de la race aryenne en Europe” (James G. Frazer, (trad. par P. Sayn) *Le Roi Magicien dans la Société Primitive*, vol. II, Paris, 1935, p. 7); このIX章のタイトルも「樹木崇拜」(Le Culte des Arbres)である。
- 26) *Ibid.*, p. 11. 文脈が曖昧とされるJ. G. フレーザーを続いて用心深く引用する。
- 27) *Ibid.*, p. 35.
- 28) J. Joret, *Les Plantes dans l’Antiquité et au Moyen Age*, tome I, Paris, 1897, Préface, pp. vi-vii.
- 29) J. Vendryes, “Sur un nom ancien de l’arbre, *Revue Celtique*, tome 44 (1927), p. 316.
- 30) P. Sebillot, *Le Folklore de France*, tome III, Paris, 1906, p. 422.
- 31) A. Maury, *Croyances et Légendes du Moyen Age*, Paris, 1896, p. 12.
- 32) *L’âge d’or de la forêt*, par S. Cassagnes-Brouquet et V. Chambarlhac, Rodez, 1995.
- 33) Julius Caesar, *Belli Gallicorum*, VI, 25.
- 34) 下掲拙稿*③ 参照。
- 35) Ed. Pauthier, XL, p. 98; éd. Benedetto, p. 33, ll. 11-12, 15-1.
- 36) 『創世記』と中世のテキストを検討して出された結論参照。『人間は樹木のごとく……』、(下掲拙稿、②参照)。
- 37) Ed. Pauthier, XL, p. 98, ll. 2-4; Ed. Benedetto, p. 33, ll. 6-7. 「果樹」によりむしろ聖書にここでは近づく。
- 38) Ed. Pauthier, XL, p. 98, ll. 13-14.
- 39) “Mahomez dist que leur paradis seroit beaus jardins plains de conduis de vin, et de lait, et de miel, et d’aigue”, (Ed. Pauthier, XL, p. 98, ll. 12-14).
- 40) C. E. Nowell, “The Old Man of the Mountain”, *Speculum*, tome XXII (1947), pp. 875et suiv.
- 41) Jane H. M. Taylor, “Aroes the Enchanter—An episode in the *Roman de Perceforest* and its Sources”, *Medium Aevum*, tome 47 (1978), pp. 30-39. (ポーロの影響は旅文学内でマンドヴィルにははるかに劣るし、明確な結論を出したものはほとんど皆無である。この意味で記述は重要であるが本稿の観点からはその興味は当然二つの庭の差異の方にある)。
- 42) Ed. Pauthier, XL, p. 98, ll. 2-3; Cf. éd. Benedetto, p. 33, l. 2. 原文は先稿(下掲①参照)

- 43) 大麻集団 (Hasisins), Ed. Pauthier, p. 99; éd. Benedetto, p. 33, l. 19.
- 44) Ed. Pauthier, pp. 100-101; Ed. Benedetto, p. 33, ll. 25-27.
- 45) "Ci devise du palais du Grant Kan", (éd. Pauthier, p. 265, chapitre LXXXIII; cf. éd. Benedetto, p. 74).
- 46) "un grant mur quarré qui a de chascune esquarreure une mille; c'est à dire que il dure tout environ quatre milles" (éd. Pauthier, p. 265; cf. éd. Benedetto, p. 74, ll. 5-6).
- 47) Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 269; cf. éd. Benedetto, p. 76, l. 2.
- 48) "devers tremontaine" (Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 269; cf. éd. Benedetto, p. 76, l. 1).
- 49) "entour une archie, un tertre qui est fais à force, qui bien est haus cent pas, et dure environ bien une mille" (Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 269; cf. éd. Benedetto, p. 76, ll. 1-2)
- 50) Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 269; cf. éd. Benedetto, p. 76, ll. 3-4. この「築山」は「万寿山」、ないし「万歳山」の事と言う。元末の陶宗儀『輟耕録』巻21に「山は一面に玲瓏石を畳み、峯巒隠映し松檜隆鬱たり」とある(愛宕松男訳、『東方見聞録』、第1巻、p. 205、注9)。
- 51) Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 270; cf. éd. Benedetto, p. 76, ll. 53-55.
- 52) その築山に聳える宮殿も「うちもそとも緑」(tout vert dehors et dedens) (Ed. Pauthier, p. 270; cf. 「うちもそとも」éd. Benedettoにはない)。
- 53) Ed. Pauthier, p. 270. Ed. Benedettoにこの行は欠ける。
- 54) *Itinerarium de mirabilibus orientarium Tartarorum*, をバードヴァで1330年5月、ラテン語で同僚のギョーム・ド・ソラーニュ(Guillaume de Solagne)に書き取らせる。古フランス語訳がジャン・ド・ヴィネ(Jean de Vignay) (Jean de Vignay, *Les Merveilles de la Terre d'Outremer, traduction du XIVe siècle du récit de voyage d'Odoric de Pordenone*, éd. critique Par D. A. Tratter, Exeter, 1990) とジャン・ル・ロン(Jean La Long) ("Le Livre des Merveilles," in *Les Voyages en Asie au XIVe siècle du Bienheureux frères O. de P.*, Paris, 1891) によりなされる。『人間は樹木のごとく……』(II), (下掲*①参照) p. 213, N. (63)。
- 55) *Les Voyages*, Introduction p. lix.
- 56) マンドヴィルに関しては先の稿(『人間は樹木のごとく……』(II))、(下掲*①) p. 217で述べた。
- 57) Jean de Vignay, *Op. cit.*, p. 63, Ch. xxvi, ll. 7-9.
- 58) Marco Polo, *La description du Monde*, éd. par P. -Y. Badel, Paris, 1998, p. 208. 本写本はシャルル・ドルレアン(Charles d'Orléans)お抱えの写字生で、写本は大公の弟ジャン・ダングレーム(Jean d'Angoulême)の所有であった(Ibid., p. 38)。
- 59) Ibid., p. 208.
- 60) "E sul colmo del monte à uno palagio tutto verde," (Marco Polo, *Milione*, edizione critica a cura di Valeria Bertolucci Pizzorusso, Milano, 1975, pp. 128-129, parag. 20).
- 61) Guillaume de Lorris, *Le Roman de la Rose*, (éd. Poirion), présentation et traduction inédite par J. Dufournet, Paris, 1999, v. 46.
- 62) 本テキストにおける「壁」の詳細はとくに著しい、としても本稿の視点からは除外される。jardin (s) テキストを通じ3回(Ibid., vv. 500, 591 et 1354)。
- 63) A. Ernout & A. Meillet, *Dictionnaire Etymologique de la Langue Latine*, Paris, 1967, uireo.
- 64) Ed. & trad. Poirion-Dufournet, vv. 102, 130, 469, 471, 477, 511, 594, 625, 633, 642, 644, 690, 696, 1258, 1287, 1303, 1319, 1323, 1329, 1338, 1341, 1347, 1375, 1415, 1419, 1431, 1552, 1561, 1564, 1636, 2931, 3003, 3010.
- 65) 「愉楽」の園の門番「閑暇」(Oiseuse)と雲霞のごとき小鳥とその声の関連(Ibid., vv. 482-483), 小鳥とグリーン宮廷風文学における伝統はほかの二拙論文で論じた。なお、「愉楽」の園はまず樹木ついで小鳥により特徴づけられる、ほかにはこのような所はない、と明言されている(Ibid., v. 480-481)。ところが「地上の楽園」に後者は不在、本稿、以下を参照。
- 66) Ibid., v. 636。「地上の楽園」訪問、「聖杯の物語」、樹木の関連は次の二拙稿で取り上げた。(下掲*、②④参照)。「樹木空間」と「薔薇園」は入れ子的関係にある。(特に下掲④参照)
- 67) Ed. Pauthier, LXXXIII, p. 269; cf. éd. Benedetto, p. 76, ll. 49-52. 先の拙稿(下掲『人間は樹木のごとく……』(II) ①) p. 217で引証のうえ強調した。
- 68) "il ot .ij. m. olifans moult grans;" (éd. Pauthier, CXXI, p. 406). ハンニバルまがいにかれば象による戦争で勝利を納めていた(Ibid., p. 406)。
- 69) "et soit l'arbre tant grant comme il veut." (p. 269; cf. "Et fust l'albre grant quant il vousisti, (il ne la soit) qu'il ne foist ce faire" (éd. Benedetto, p. 76, ll. 51-52)).
- 69) *Op. cit.*, t. I, Préface, pp. xii-xiii.
- 70) *Op. cit.*, t. II, 1904, p. 233-234.
- 71) V. Hehn, *Kulturpflanzen und Haustiere in ihrem Uebergang aus Asien nach Griechenland und Italien*

- sowie in das übrige Europa, Berlin, 1894, p. 498.
- 72) Ed. Pauthier, LXVII, p. 182.
- 73) 『世界の叙述』のプロローグは再度「われわれの書」(notre livre) (主格)、(nostre livre) (被制格) (Ed. Pauthier, p. 3; ed. Benedetto, p. 3, ll. 7 et 12) とし、マルコとルスチケロとを指示。イタリアの学者、ヴァレリア・ベルトルッチ・ピッツォルツ (上掲注 60) は綿密な文体の研究と統計から「われわれの書」が「(作品全体で) 32 回」現れる事を指摘している (“Enunciazione e Produzione del Testo nel Milione”, in *Studi Mediolatini e Volgari*, vol. XV (1977), p. 10)). そして livre という用語に注目し、「結局テキストの対象と目的が「書」として常時指示されるのは作品全体で 50 回以上にのぼる」(L'oggetto testuale che ne è lo scopo viene indicato infatti costantemente e per *più di cinquanta volte* nella totalità dell'opera) (Ibid., p. 10) とし、この語が共同作業を示す当初の用語であり、この用語のもとに『世界の叙述』が目論まれたとする。このタイトルに関しては C. Segre と見解を一にしている (*Grundriß der romanischen Literaturen des Mittelalters*, Heidelberg, 1970, vol. VI, tome 2, p. 196)。 (タイトルに関し、伝統的な『世界の像』(*Image du Monde*) —— 百科全書の地理書とセツツ伝説の関係、cf. 拙稿『人間は樹木のごとく……』(IV)、(下掲*④) (印刷中) —— との間で見解を二分している)。ヴァレリア・ベルトルッチ・ピッツォルツは別稿でポーロー一家 3 人のフランス語の能力が相当なものであった事をも指摘している。当時の中近東での通商をもっぱらとしてきた彼等はフランス語の知識なしには商売は不可能であった (Lingue e stile nel “Milione”, in *L'Epopea delle Scoperte*, a cura di R. Zorzi, Firenze, 1994, p. 62)。
- 74) 下掲、*①, p. 215.
- 75) (Ed. Lecoy, v. 590; éd. Strubel, v. 592) やサラセン (Ed. Poirion et Dufournet, v. 592)
- 76) 7 歳の「悦び」と舞う「愉楽」は優雅な若者として描かれているが、ついには庭園の主と変貌すること、さらにアーサー王伝説で王者の徳目としての *deduit* と深く繋がろう (フランスで刊行中の拙稿参照、*Mélanges*, Paris, 2000 (印刷中))。
- 77) 下掲*①参照。
- 78) 下掲*②参照。
- 79) 次の証言を想起している。K'AZAKS の遊牧民にあって指標・定点となるものは完全に不在、北西の国境の突端に一本の樹木が佇立する。五本の太い枝を延ばし「その影は 500 人の騎馬兵が日射しを避ける事ができる」(une ombre peut abriter cinq cents cavaliers) Ohia kok djamoto と呼ばれ、「全西域」で「最も崇められた対象」(l'objet le plus vénéré de toute l'Asie centrale) であった (C. Imbault- Huart, *Recueil de Documents sur l'Asie Centrale*, Paris, 1881, p. 116)。
ステップの一本の「大木」は崇拜の対象で人々はそのまゝに額突いた (J. P. Roux, *La Religion...*, p. 122; du même, *Faune...*, p. 53)。

本稿は次の稿の続編として構想されている。①『『人間は樹木のごとく……』(II) —— 樹木と二人の旅人』、『明星大学研究紀要』、明星大学 (青梅キャンパス)、日本文化学部・言語文化学科、第 7 号、平成 11 年 3 月 25 日、pp. 206-218 (pp. 1-13)。

上記論稿のほかに同名のタイトルの次ぎの稿があり、やや間接的に本稿に関わる。②『『人間は樹木のごとく……』 —— 樹木の伝説・聖杯の伝説 ——』、『表現 —— 目的と手段 ——』、明星大学青梅校舎日本文化学部・共同研究論集・第 2 集、平成 11 年 3 月刊、pp. 144-173 および③「樹下の従姉たち『人間は樹木のごとく……』(III)」、『フランス語フランス文学研究』(神沢栄三教授追悼号)、名古屋大学、文学部、1999 年 3 月 31 日、pp. 13-21、④『『人間は樹木のごとく……』(IV) —— 地上の楽園 —— への旅、『想像力と現実描写』、明星大学青梅校舎日本文化学部・共同研究論集・第 3 集、平成 12 年 3 月刊行 (印刷中)。